

横浜市立大学学術情報センター

貴重書 月替わり展覧会リーフレット (179)

2026年7月の作品は
『山海経』

展示テーマ

～想像と現実の狭間の世界～

『山海経』は、中国古代に成立した神秘的地理書であり、各地の動物・植物・鉱物を記録するとともに、多くの怪物や神々を描いた書物として知られる。また異本が複数存在し、記述される生物の姿形が本によって異なることも特徴である。

こうした独特の内容が生まれた背景には、中国古代社会の空間認識——「内なる世界」と「外なる世界」——が深く関わっている。人々が生活した「内なる世界」とは、河岸段丘や山麓に形成された邑とその周囲の田畑からなる安定した共同体の空間であった。これに対し「外なる世界」は、集落の外に広がる森林・原野・沼沢・山岳といった未知の領域であり、虎や蛇などの猛獣が徘徊する、人々にとって恐怖の対象となる空間である。『山海経』はまさにこの外なる世界を扱った書であり、その怪異的で非現実的な記述は、人々が危険な自然を想像力によって理解しようとした結果といえる。内容は大きく山岳地帯を記した「山経」と、中国大陸外の世界を描く「海経」に分かれ、「山経」は南・西・北・東・中央の五方位により「南山経」～「中山経」の五篇で構成される。「海経」には「海外経」・「海内経」・「大荒経」などが含まれ、内外世界の境界を越えた想像的地理が展開されている。

今回は、古代の中国に住む人々が外なる世界に想像した世界を少し覗いてみようと思う。



全 18 巻 7 冊『山海経』

江戸時代

作者：郭璞（276～324）選

版元：阪府書林 前川善兵衛

縦 25 cm × 横 18 cm

～古代中国の人々が外なる世界に想像した不思議な生き物たち～



・鹿蜀（ろくしょく）（南山経）

ちゅう 扭陽山に棲む獣で全体として馬のような姿で白い首と赤い尾を持ち、歌うように鳴くという。鹿蜀を身にお佩びれば（身につける）子宝に恵まれるとされる。



・獬豸（はくい）（南山経）

基山という山に棲んでおり、頭ではなく背中に目がついていて、尾が9本、耳が4つある羊のような獣。この獣を身に帯びれば恐怖心がなくなるとされる。



・名前不詳（南山経）

山神。柜山から漆吳山に至るまでの十七山の神々でありみな体が龍で頭が鳥といった姿をしているという。固有名称を持たない。



・何羅（から）北山経

譙明山を流れる譙水に多く生息し、1つの頭に10もの胴がついた姿をしている。犬のように吠える。これを食べると腫物が治るという。



・灌疎（かんそ）（北山経）

頭に角を持つ馬のような姿で描かれている。帶山という山に棲んでおり、鍍金（金を塗る）された角が生えている。火災を避けるのに良いとされる。



・危（き）（北山経・海内西経）

天神の1人。式負（天神の1人）の配下とされる。式負とともに猓羆（元は天神だったが式負らに殺され怪物となった）を殺したため、疏屬山で右足に桎をして両手と髪を後ろに縛り、頂上の木に繋がれたという。



・相柳（そうりゅう）（海外北経）

共工（古代中国の覇者）の臣下。9個の人間の頭を持つとされる。相柳が進んだあとは毒のある水が溢れた沼沢地へと変わった。禹（伝説上の聖王、夏王朝の初代皇帝）は人々のためにこの怪物を退治したが、怪物の血が流れた土地には何も育たず、人も住むことが出来なかったという。

参考文献

- ・『平凡社ライブラリー 34 山海経 中国古代の神話世界』高馬三良訳（1994年）
- ・『東方選書 44 中国の神獣・悪鬼たち 山海経の世界[増補改訂版]』伊藤清司著（2013年）
- ・神魔精妖名辞典 <https://shimma.info/info.html>（2025年11月30日最終閲覧）

あとがき ～貴重資料に触れて～

今回、初めて貴重資料に触れる機会をいただいたが、書物の扱い方や昔の資料の質感などを実際に触って知ることができてとても貴重な経験になった。また、山海経についても、今回の講義で知るまでは全く知らなかったが、妖怪や想像上のキャラクターが好きな私にとってとても興味深い内容であり、とても楽しく資料を読むことができた。また機会があれば貴重資料に触れ、自身の知見を増やしたいと思った。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、展示品を除き申請が必要です。

また、利用は学術研究目的に限らせていただきます。

※過去の展示はオンラインでも公開中です！



第180回展示は令和8年9月上旬からを予定しています。

令和8年8月3日発行

令和7年度 日本文化論B受講生 編集

236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2

横浜市立大学 学術情報センター